

野鳥のいる風景



● 熊本商大名誉教授
作家 甲斐 弦

商大を定年退職し名誉教授になってからは大学には週二日しか出ない。あとは毎日机に向かい読んだり書いたり生活である。「悠々自適ですな。」などと言う人もいるが、内実はそうのんびりしたものでもない。人生の持ち時間もあとわずかとなったし、お召しに来るまでにあの仕事を、この仕事を、と気ばかり焦ってなかなか進まない。物を書くというのは想像以上に体力を要する作業であって、若い時は二晩三晩徹夜しても平気だったし、一晩に二十枚、三十枚と書けたこともあるが、今はそうは行かぬ。終日机に向かっていてただの一枚も書けない日だってある。そんな時はまさに疲労困憊（ひろうこんぱい）、茫然（ぼうぜん）として荒れた庭を眺め、ああ、今日は駄目だったなあ、と胸の中でつぶやいている。

そんな時私を慰めてくれるのは庭にやって来る野鳥である。モチノキ、ネズミモチなど実のなる木を数多く植え、庭は自然な方がいいと（実はこれ、怠けるための口実だが）ろくに掃除もせず草も取らず荒れ放題にしているため、かえって鳥たちには安心感を与えるの

であろう、雀、ジョウビタキ、ヒヨドリ、ツグミ、アオジ、モズ、ウグイス、その他名も知らぬ大小の鳥共が入れ替わり立ち替わりやって来て、枝から枝に飛び移り、庭の隅をつついて虫やミミズを食べ、一角にすえた水盤の水をうまそうに飲み、時には派手に水浴して私の目を楽しませてくれる。

この間などは大きな小鵝（こじゆけい）のつがいがやって来て、三十分近くも庭を歩き回っていた。お天気がよく、暖かだったせいもあるろう、いかにものんびりと楽しそうであつてはメスらしい一羽が芝生に寝そべり、ちよと人間が背伸びをするみたいに、羽と脚を何度も思い切り伸ばしていた。オスらしい一羽は、脇（わき）に立って、じつと待っている。

「ああ、いい気持」

「ねえ、グリーン、もうそろそろ行くころよ」

そんな対話ガラス戸越しに聞こえるようであつた。

こんな光景を眺めていると、書けない日の憂いや悲しみもどこかに遠く消えてしまふ。そして新しい勇気と意欲

が胸の底からこみ上げて来る。
こんな時ほど生きるといふことの尊さ、命というものの有難さを身に沁（し）みて感ずる時はない。鳥の動きを目で追いながら私は思う。

七十二年。この弱い体で、俺もよく生きて来たな。十年近い大陸生活で、何度か銃火の下をくぐり、俺よりもっと元気な、もつと優秀な友人たちが何人も非命に倒れたのに、俺だけは不思議にも生き残り、引き揚げ、失業、開墾、病臥（びょうが）と荒波にもまれながらも今日までくじけずに生きて来た。大して金持にもならず、大して出世もせず、むしろ平凡な老境、あのツグミやジョウビタキとさして変わりのない生活に今ははいつているのだが、それでも子供のころから親父にたたきこまれた精神だけは忘れない。

「士のとうとぶべきは気節あるをもつてなり。気節なきは士にあらざるなり」

親しかった肉親や友人たちによいよあの世でめぐり会う時、「気節」の二字だけは手のひらに大きく書いて示そう。

盆踊りからジャギーまで



● 熊本放送番組審議員
河上 洋子

海外の旅から帰るたびに、日本は何と不思議な、雑多な文化をもつ国だろうと思う。熊本も勿論（もちろん）同じ。衣、食、住、すべてが和洋混在、何でも取り入れて、それが奇妙な形で調和して何の異和感もない。熊本城の古い天守閣と競い建つ、市役所の超近代ビルも自慢でこそあれ、眉をしかめる人はあまりいない。ある人が「言うなれば、今の日本はシルクロードそのものだ。」と書いているが、共感する面も多い。東西の文化を何でも消化していくたくましい文化とも言えようか。

去年の丁度今頃、私はラジオの番組で、そんな様々ならしのあり様取材して歩いたことがある。ある日、熊本市内のステンドグラス制作工房を訪ねた。かつてスペインや、パリの旧い教会で見た、美しい荘厳なステンドグラス、そんなイメージを抱いて行った工房は、全く違う雰囲気であつた。

「宗教や、芸術とは無関係、全くのインテリアです。今の感覚で、楽しく自由に美しい色ガラスを生活にはめこんでみたいのです。邪道と言う方もあるけれど一向にかまいません。若い女社長さんは気負うことなく話してくれた。

和風の玄関や、間仕切りの壁、照明器具にと結構喜ばれているそうだ。和風住宅は「木と紙」と思いこんでいたけれど、よくよく考えれば、今時、純粋な日本風の家があるだろうか。

建材だつて様々のものが使われ、第一、タタミと椅子の併用は普通の住み方。お茶室とダイニングキッチンを組みこんだ家を新築した茶道家の友人もいる。ステンドグラスを玄関にはめこんでも、さほど驚くことはないのだろう。しかし、こんな複雑な家に、東西の家具を並べて暮らすなんてことは、先日旅行した南米アンデスの町でも、中国やヨーロッパでも先づみかけたことはなかった。

私は、また「ジャギー教室」をのぞいた事がある。大きな鏡のついたレッスン場で、テンポの早いジャズ音楽に乗って、レオタード（何となくめらかに出てくる横文字よ）に身を包んだ生徒さんが楽しげに体を動かしていた。私と同じ年格好の、少し太目のオバサン生徒も結構サマになつている。指導の若い女先生は「ジャズのリズムに素直に体をのせて、思う様に表現すればいいのです。」とおっしゃる。思うこと

を素直に、表情や体で表現する、何と魅力的なことか、私どもが、かつて受けた躰（しつけ）の基本は、表情も態度も控えめに、であつた。

「顔で笑つて心で泣いて」芥川竜之介の「手巾」に出てくる婦人は息子の死を笑顔で告げながら、卓の下の手にちぎれる様にハンカチを握りしめていた。これこそ日本人と、国語の先生が絶讃されたことを思い出す。戦後三十年代に、あのロカビリーが上陸した時、私どもはその騒音に途方にくれ、熱狂する娘たちに眉をしかめたものだ。それが何と、今は抵抗もなく盆踊りのメロデーを、ジャギーのリズムに乗り替えた。テレヤの熊本人も少しづつ変わるのだろうか。

取材をして面白かつたのは、偶然かもしれないけれど、伝統的分野は男性が、女性は新しいものに挑戦していた姿が目立ったこと。

新しい文化がどうなるのか私にはわからないが、それを育てて行くのは若い女性ではないか、そのためにも、教育や施設、それを生かす機会がもつと与えられてほしいと思うのである。